

# 絵本作家として動物観察に明け暮れました。 今は海の見える部屋でゆったり暮らしています

湯河原(ゆうゆうの里) 鷲尾敏子様(90歳) 平成30年8月 一人入居

絵本を書くことがまさか仕事になるとは思わなかった

東京下谷区(今の台東区上野公園の近く)の生まれ、6人きょうだいの中で育ちました。集団に入るのが苦手というか、一人で考えるのが好きな子供でした。小学校3年の時、上野動物園に遠足で行った時に書いた作文が先生に大変褒められました。それは園で出会った動物たちのことを全部書いたもの。あれが私の動物絵本の始まりだったかも知れません。  
女学校時代は、数学がすごく好きになり数学の教師になりたいと



動物愛護週間の上野動物園で、子供たちに紙芝居を演じる鷲尾様

思ったこともありましたが、経済事情を考えると大学に行きたいとは言えませんでした。保母の学校に行つてから都立保育園の試験に合格。保母になつて乳児クラスを担当していると、だんだん子供達に可愛くなつてきました。保育園では言語研究グループに入り、作品を書く機会に恵まれ『めばえ』に連載していただけるようになりました。びっくりです。

結婚してから多摩動物公園の近くに住み、仕事に夢中になりました

結婚してから日野市に家を建てると、今度は多摩動物公園が歩いてすぐの所にあり、動物公園に通いつめては、夫からは「動物園バカ」と言われました。動物の生態を観察していると色々となつて、次々に「なんで? どうして?」と飼育員さんに質問したくなります。当時の園長で文筆家でもある中川志郎先生には「鷲尾さんは好奇心が強いね」と言われました。『小学生新聞』に毎週連載していた時は、日曜日に原稿を上げるため、毎日動物園に通いました。仕事が面白くて、面白く



〈ゆうゆうの里〉の中庭で

て。夫と息子のことを放つておいた(笑)。連載は二年3か月続きましたが、家族の応援なくしてはできなかったな。そうやって、動物を観察し調べていったことを書いたのが、「どうぶつの目」「どうぶつの口」「どうぶつのおっぱい」「どうぶつのはな」「どうぶつの耳」というシリーズで、初めて書いたノンフィクションの本となりました。

東京が好きを私を、湯河原に連れてきてくれたご縁

80歳まで仕事をしていましたが、夫が亡くなり、息子が亡くなつてしまつたので、具合が悪くなつたらどうしようと漠然と不安がありました。東京が好きを私は、東京の老人ホームに入ろうと手続きを進めていたのですが、「ゆうゆう」の表紙を描いている藤本四郎さんから「ゆうゆうの里」があることを聞きました。根府川にあるカフェレストランが気に入ついたので、そこから少し足をのぼすだけだし、温泉があるのも良いなと思えました。夫は「亡くなった

ら散骨して欲しい」と書置きしてあったので、よく泊まりに行つた下田の海に散骨しました。息子も父親と同じように下田に散骨しました。体験入居で泊まりに来た時に、募集の高杉さんから「海の見える部屋が一部屋空いています」と聞いて、下田に続く海を想像して、毎日海が見える部屋がいいなと、入居を決めました。

温泉に入るのでよく眠れます。自然体で健康を維持していきたい

毎朝ラジオ体操をしてから食堂で朝食を摂ります。お昼は自炊です。食堂で工夫された色々な食事ができることは幸せなこと。さまざまな方とお話もできます。毎日温泉に入る楽しみもあります。温かくていい気持ちになり、体がポカポカしてよく眠れるようになりました。

下町の庶民のことを書いている藤沢周平の作品が好きで読んでいます。本を読んで難しい言葉に合うと辞書を引いてみる。それが良いのかなど。仕事の方は編集者が代わつて行くので減つて行くのは仕方がないことですが、去年は新しい紙芝居を出すことができました。紙芝居といえば、コロナ前までは、保育園の園児達がお遊戯を見せに訪問してくれました。子供達に紙芝居を披露した時の弾けるような笑顔は忘れません。